

発電ダムが建設された時代 —聞き書き 御母衣ダムの記憶

浜本 篤史 著
新泉社 2014年



元毎日新聞中部本社報道センター編集委員
安部 文晴

「発電ダムが建設された時代」の舞台となった御母衣ダムは、「二〇世紀のピラミッド」とも形容された岐阜県白川村、旧荘川村（現・高山市）にある岩を積み上げて堰堤を築いたロックフィル式ダムだ。着工は一九五七年で、六一年に営業発電を開始した。着工前年の五六年、経済白書は「もはや戦後ではない」とい

めのダムだった。だが、この事業によって、水没予定地の一〇〇〇人以上の住民が移転を余儀なくされていることも忘れてはならない。本書はこうした時代の巨大プロジェクトを巡り、「目撃した人々」「移転した人々」の二部構成で九人が記憶を遡り、「当時の思い」「今の思い」を語っている。

本書で御母衣ダムを「その名を知っている人はそれほど多くないかもしれない」とも記す。湖岸に移植された荘川桜を通して、ダムを巡る物語を知る者も多いかもしれない。本書のテーマは「御母衣ダムは地域や住民にとってどういう事業だったのか」を探ることだ。「半世紀を振り返ってあなたの人生にとってダム事業やそれに伴う移転は何だったのか」と問うことだ。荘川桜の逸話だけでなく、ダムと関わった人の数だけ、人生があり、ドラマがあることを改めて知ることができる。それは、「巨大公共事業というものが、地元住民にとって、どういうものであるのか」を探ることにもなる。

人の記憶は、時間とともに薄れ、印象深いエピソードばかりが鮮明に残る。さらに、記憶は良くも悪しくも脚色される。「過去の出来事に対する評価」も、「経済的变化」「コミュニティの変化」「文化的変化」によって変わるだろう。「当事者の

現在の暮らしをぶり」によっても、ダムに対する評価も変わる。名古屋市立大学で二〇一四年七月に開かれた本書の刊行報告会で、ダム事業ゆかりの人物が「村にいたままで高校に行くことができたのだろうか。ダムがあるから今がある。ダムができてよかった」と語っていた。「今の暮らしに満足しているからこそ、ダム建設を『よかった』と評価している」ともいえる。これもまた、真実であり、大切なことだ。

本書は「聞き書き」という手法をとっており、編者の浜本准教授も「『語り手』が進んで語った内容ばかりでない」（「はじめに」）と記している。評者が長年仕事としてきた新聞記者もまた、取材相手の記憶を呼び起こし、記事化することが多い。「客観的、具体的な事実を聞き出し、書くこと」が大前提だ。「一九〇〇年〇月〇日のことを教えてほしい」と聞いても、相手はなかなか具体的に話してくれない。そんな時、家族の冠婚葬祭、子供の学

年などを尋ねる。当時の口ずさんでいた流行歌がなんだったかを聞くこともある。それをきっかけに相手の気持ちやほぐれ、記憶の引き出しが開いてくる。その引き出しの中には、本人も忘れていた様々な出来事もまじり込まれていることがよくあった。本書の「聞き手」も、何度も証言者

のもとに通って、気持ちを解きほぐしながら、記憶を引き出したことは想像に難くない。

記憶に登場する事象が具体的であればあるほど、証言は重みを増す。本書で証言者九人は五〇年、場合によっては五〇年以上前の情景をリアリティをもって語っている。第一部冒頭に登場する七三歳のAさんは、正月のおやつのことを、「温州みかん一個にカチグリと干し柿」（二三頁）と具体的に話している。これは後段の「そいつはおいしかったもんで覚えとるな」という言葉にリアリティを与える。

八一歳のEさんは「ハセ時計という富山の時計屋が来て買った。スイスかどっかの時計で、当時はこんな時計でも飛ぶように売れた」（九九頁）と語り、読者はダム工事がもたらした地域の賑わい、繁栄ぶりを時計を通して知ることができる。Eさんは「腕時計」と同じ引き出しに入っていた別の「記憶」にも気がついたことだろう。

読者も時代背景を学んだ上で、語り手の言葉に耳を傾けることが求められる。年表を聞くと五六年、芥川賞に石原慎太郎氏の「太陽の季節」が選ばれ、このころ評論家・大宅壮一郎氏は「二億白痴化」とテレビ批判を行った。五九年の皇太子ご成婚でテレビ受像機は前年の二倍の

二〇〇万台に増えたことが分かる。東海地方をみると、ダム工事が着工した五七年三月、名古屋駅前に

市内初の地下商店街がオープンし、一月には名古屋―栄町間の地下鉄が開通した年であることを知り、その時代の空気を感ずることが出来る。

五〇〇人以上が犠牲者となった伊勢湾台風の来襲は五九年九月であり、戦後初の国産旅客機「YS-11」の飛行テストが名古屋空港から伊勢湾上空で行われたのが六二年八月だった。

そんな時代の中、御母衣ではダム湖に沈んでしまう集落住民による「御母衣ダム絶対反対期成同盟守会」が活動していた。ダム事業主体の電源開発株式会社は「立ち退きの余儀ない状況にあいなった時は、貴殿が現在以上に幸福と考えられる方策を我社は責任をもって樹立し、これを実行することを約束する」と記した「幸福の覚書」を示していた。

評者が浜本准教授の研究に関心を持ったのは私的な理由だった。本書に「御母衣に来ていたのは間組、酒井建設、佐藤工業、この三社だった」「地下に穴を掘って五、六キロ先に流す排水トンネルをやったのが酒井建設」(九〇頁)とある。評者の父親は酒井建設のエンジニアとして御母衣に赴任していた。五九年四月生の評者もまた生まれると同時に母親と一緒に御母衣に引っ越してき

た。評者が後に毎日新聞社に入社し、記者としての初任地が岐阜支局であったのも奇縁だろう。

毎日新聞もまた御母衣ダム建設に絡んでスクープを放っていた。五八年六月、地下の排水トンネルで落盤事故が発生、逃げ遅れた三一人が閉じ込められた。毎日の記者は排水管を通じてカメラを下ろし、閉じ込められた遭難者に内部を撮影してもらったことを現場責任者に頼み込んだ。写真は「こんなに元氣だ」の見出しで一面に掲載された。この時、許可を出した責任者が父であったという

本書読後の二〇一四年一月、御母衣ダムを訪れ、住んでいた平瀬の地を訪ねた。そして、長年のある疑問が氷解した。両親が御母衣ダムを語るとき、「ミホロ」と発音しており、評者もそう発音していた。だが、岐阜に赴任すると御母衣は「ミボロ」だった。今回の訪問でMIBOROダムサイドパークの職員から「建設当時、東京の電源開発社員もミホロと発音していたようです」と教えられた。この発音の違いは、工事が行われていた時代、御母衣と中央(東京)の距離が地理的にも、精神的にも「いかに遠かったか」を示すエピソードなのかもしれない。

浜本准教授は本書「あとがき」で「『記憶』というものは必ずしも固定的なものではなく、現在の視点から過去を再構成することである」としている。また、「記憶」は他者や所属集団との相互作用を経て構成されるものである」と指摘し、地域にとどまった人、地域を離れた人にとつて「『記憶』は別のものでありうる」としている。つまり本書に登場する九人の「語り」もまた、「個人的な思い出」としてだけでなく、「社会的に形成されたもの」でもある。本書の中で「ダムになつてよかった」と語る人もいる。だが、こうした肯定的な発言も「社会的に形成されたもの」であるかもしれないという点に留意して読み解かなくてはならないだろう。

巨大公共事業の中でも、ダム事業は「高熱隧道」「金環蝕」「黒部の太陽」「ふるさと」……と小説、映画の題材となってきた。多くの人がダム事業を小説や映画を通して認識し、イメージしてきた。言い換えれば、ダムについての固定的なイメージを小説、映画で持つてしまった可能性も高い。浜本准教授らによる研究は小説や映画とは違い、社会調査などに基づき、住民らに「御母衣ダムとは何か」「公共事業とは何か」を問うている点がきわめて重要だ。

一定期間の耕作を終えると、その地を放置し里山に戻し、再び火を放って耕地にする「焼畑」について、第二部のIさんが触れていた。焼

畑は日本各地でみられた農法だが、五〇年ほど前にほとんど姿を消したという。荘川で営まれていた焼畑は、どうなっているのだろうか。焼畑農法が営まれなくなっているとすれば、ダム事業の結果なのだろうか、別の理由なのだろうか。

巨大事業、巨大プロジェクトの評価には時間がかかる。「コンクリートから人へ」を語る時、ダムはコンクリートを使った公共事業のシンボルだ。「コンクリートから人へ」が求められる時代、「真に必要な公共事業は何か」のヒントも浜本准教授らの研究成果の中に見いだせるだろう。リニア中央新幹線の事業が進む中、浜本准教授らの研究は、関係者にとって大いに参考になるだろう。

「ゆずり葉」(河合醉著作)という詩がある。一節に「世のお父さん、お母さんたちは 何一つ持つてゆかない。みんなお前たちにゆずつてゆかのために いのちあるもの、よいもの、美しいものを、一生懸命に造っています」。すべての公共事業が、この詩のように、ゆずつていけるものであってほしいと願いながら、本書を読み終えた。

浜本准教授は評者の取材に「『御母衣ダムとは何だったのか』を総括する研究を、二年の間にまとめた」と話していた。研究の総括が待ち遠しい。